性格は「変わる」？

――「ゆらぎ」構造に目を向けて――

大森正樹（南山短期大学教授）

「どうにかならんでしょうか、先生、この性格。何とか変わらんものでしょうか。この性格で、私、ほんとに苦しんだんですから」。

かつて精神科の診察室にいた頃、これに類した質問をどれだけ聞いたことだろうか。

「いや、変えよう、変えよう思っても、それはなかなか変えられるもんじゃないですよ。それより、その性格とじょうずに付き合うことの方が、うまくいくんじゃないですか」。

「・・・」。

私の答えは、大抵はこんなものだった。

私たちは「変わる」という言葉をよく使う。

① 久しぶりに会った友達の頭に白いものが目立っていたり、顔にしわが増えていたり、どこかが薄くなっていたり、学生時代あれほどスマートだったのが、何時の間にやらお腹が突き出ていて、立派に中年であることを証明していたりする。そこで思わず、「君も変わったなー」。すると、大抵「お前こそ」と来る。体つきは変わる。

② 世界は日々変わっている。昨日まであった国家が消滅して、新しい国が誕生している。これまでの主義は影をひそめて、別の主義がそれにとって変わっている。イデオロギーは変わる。

③ 列島改造などと叫ばれて、丘は崩され、森林は伐採され、田畑は宅地に替えられ、海は埋め立てられた。わが国土は日々変わる。

④ 久しぶりに、子供のとき育った町へ行ってみた。あの店はあそこの角にあったと思って、角まで来たら、店はあったが、かつての店ではなかった。もっともっと立派になって、街角の雰囲気もなんとなく違う。子供の時の町はもは

やない。町は変わる。

⑤　かつては自分もギターを片手にポピュラー・ソングなるものにうつつをぬかしていたのに、今、子供がロックやヘヴィーメタルにのめりこんでいれば、そんなものは、くだらんからやめろと言う。趣味は変わる。

⑥　一昔前に作ったスーツを出してみた。虫も食っていない。けれどそれを着るのがなんとなく、おっくうだ。もう流行のものではないから。流行はめまぐるしく変わる。

⑦　かつて学生の頃、なんとかして外国へ行きたいと思っていた。持ち出し外貨の制限があった。ところが今は何のことはない。世界中の至る所に日本人はいるし、しかも若者が多い。日本は豊かになった。財は変わるし、

⑧　交通機関は発展し、変わる。

⑨　相思相愛で結婚したと思っていたのに、数年したら、自分の思い描いていた人はこの人ではなかったと言って、さっさと離婚してしまった若夫婦。人の気持ちは変わる。

⑩　A子さんは、この前のT合宿に行ってから、何だか人が変わったようだ。今まで引き込み思案だったのが、よくしゃべるようになった。本当にA子さんは、変わった。性格は変わる。

⑪　エジプトのファラオの圧政に苦しんだ、イスラエルの民を救いだす立て役者に抜擢されたモーセはしかし、神の前でだだをこねて、彼以外の人をそれに当てるように懇願したら、「人間の口を作ったのは、だれか？・・私があなたの話を助けて、言うべきことを教えてあげよう」（出エジプト、４、１１～１２）と神に言われ、その長い、遥かな道をたどり始めた。モーセは変わった。

⑫　これまではキリスト教徒を迫害し、死に追いやった張本人であったパウロが、ダマスコへの途上、突如天から光が輝いて、地上に倒れ、「サウロ、サウロ、なぜ、私を迫害するのか」という神の声を聞いた（使徒行録、９、１～４）。それ以来パウロは迫害する者から、迫害される者の側に回り、遂には殉教した。パウロは変わった。

以上思いつくまま、「変わる」と言われる事例をあげてみた。確かに私たちは日常よく「変わる」という言葉を使うようにみえる。そのため「変わる」という言葉は当たり前のものとなって、意識してその意味を問いただすということはしないようにみえる。しかし、「変わる」ということそのものに眼を向けてみると、この用法は多義的であることに気づく。それゆえ、今、これを正面から取り上げることは必要であろう。そのためには、そのいちいちについてそこで語られている「変わる」という語の意味は何であるのか、「変わる」という語を用いることによって意図されていることは何であるのか、を問わなければならない。すなわち①「体つき」、②「イデオロギー」、③「国土」、④「町」、⑤「趣味」、⑥「流行」、⑦「経済状態」、⑧「交通事情」、⑨「気持ち」⑩「性

格」、⑪「モーセ」、⑫「パウロ」等が「変わった」と言われるその際の「変化」はいったいどういう意味で言われるのか、である。

1）ところでこの①から⑫の各項目を見て、すぐわかることは、①、③、④は身体、土地に関するものであって、それは根本的に「物」であることから、「変化」という特性のもとにあることである。古来、哲学上、「物」の根本性格はmutabilitas（可変性）にあるとされてきた。変わらないものは「物」ではないとさえ言える。物は刻一刻とその相貌を変化させているのであって、人間の目が充分にそれを見通しているかどうかには関係がない。その意味で「変わる」ということが、容易に、そして最もふさわしく語れるのは物の領域においてである。但しこの変わるは、「質」や「量」の変化を示していることに注意する必要がある。

2）そしてまた⑦と⑧も、変わるということの特性を明らかに示すものである。今日日本が世界の経済大国であるからといって、十年後はたしてそうかは誰も言えない。交通事情に至っては、これも年々変化してやまない。それゆえ、⑦と⑧も充分変化する性格をもっていると言えるだろう。

3）⑥の流行はその時代の世相を反映するものとして、存在理由があり、そのかぎりで⑤の趣味と同じ側面をもつ。しかし流行の変化は多分に人為的であるため、操作が入るという点で自然なものでない。しかし変転極まりないこの世の姿を充分に表すものと言えるであろう。だからわれわれは安心して、流行は変わると言ってよいだろう（但し、繰り返しながらというおまけを付けた上で）。

4）また⑤趣味も確かに変化するように思える。派手好みだったのが、幾分、渋好みになっていたり、また、日本人に多いことだが、初めは洋風のものが好きだったが、歳をとるにつれて和風のものに回帰していくという現象が見られる。だが、好みというものは、例えば思い切ってこれまで身に着けなかったものを着けてみるといった、かなり意識的な行為を内に含んでいるところがあり、日本回帰といっても、実はもともとそういう趣味であったものが、先に意識の方が、例えば洋風を選んでしまったということがあるのではなかろうか。この意味で趣味は必ずしも、一義的に変わるとは言えないように思える。つまり、当然といえば当然だが、趣味の方が変わるのではなく、それを選ぶ主体の意識が変化するのである（このことは「変える」という観点から改めて論じる必要がありそうだ）。

5）②イデオロギーも趣味と似たところがあって、イデオロギーそのものが変わるわけではなく、イデオロギーを構成したり、それを採択する人間の考え方や趣味が言ってみれば変化したのである。

6）⑨人間の気持ちはどうだろうか。初めは好きだと思っていて、相手のすること、言うことが何でも好ましかったのに、いったん嫌だと思ったら、何から何まで、嫌でたまらない。これまでのあのやさしい気持ちはどこに行ったの

だろう。このように気持ちの定まらないことは、相手が人間であるだけ、簡単に趣味が変わったようなものだと言えない側面をもつが、はかないものの代名詞として考えられる。ただこの場合も簡単に変わったと言い切れない面があるのではないか。それは最初にこの人だと思っていたその判断に不十分な点があったことである。勿論結婚に至る時点で、その人間を判断するのに十分なデータがなかったかも知れないし、経験が浅くて、人を見る眼が啓かれていなかったかも知れない。あるいは共同生活の訓練が幼児から充分なされていなかったのかも知れない。そうした要素が多くある以上、簡単に変わったとは言えない。そうした事態に直面して、始めて自分と他者の有り様の現実に思い至ったかも知れないからである。

7）それでは⑩A子さんの性格や⑪モーセと⑫パウロの事件の場合はどうであろうか。これを一括して論ずることは、乱暴だと見られるかもしれないが、しかしよく見ると、それらに共通するところがあると思われる。

引っ込み思案だったA子さんが、積極的になったり、イスラエルの民を救いだす大任を前にして尻込みしていたモーセが勇躍、民の指導者になったり、パウロがキリスト教徒の迫害者から、逆に迫害される者（キリスト教徒）になったこの事態は、性格が百八十度変化したことを意味したのであろうか。今、A子さんの場合は単なる例であるので、仔細はわからないが、モーセやパウロについては、この「変化」の前の行状を調べてみれば、次のようなことに気づくのである。例えば、モーセはどうして、エジプトの地から逃れて、ミデアンの地に赴いたかと言えば、それはエジプト人の兵士が、同胞のイスラエル人を虐待するのを見るにしのびず、大いなる情念の固まりととなって、その怒りを爆発させ、かのエジプト人を殺害したためであった。そしてこの激情は砂漠の中での困難な旅の支えともなっていた。一方、パウロは熱心なユダヤ教徒であって、その教えを守ることにかけては人後に落ちず、ためにこの教えをなみしようとするキリスト教徒は許すべからざる存在であったことは、当然である。この激しい教えへの熱情は彼がキリスト教徒となった後も変わることなく、燃えつづけたのである。してみれば、簡単にモーセやパウロの性格が変わったとは言えないのではないか。彼らの性格はむしろところを得て、かえって本領を発揮したとさえ言えるのではないか。A子さんにしても、突如積極的な態度に出たのではなく、積極的な性格を従前からもっていたが、それが何かの理由で抑圧されたいたのが、解放されたと考えることはできまいか。

以上のことから、われわれはどのような結論を引き出せるであろうか。

簡単にわかることは、「物」に関しては、われわれはかなりの程度容易に変わるという言葉を使うことができそうだということである。これは1）、2）の例に明らかであると思われる。また一義的に物と言えない流行も変わることは、3）で明らかである。これは第二義的に、人が作り上げるものとして、物

の部類に入るからである。ところで、4）や5）の趣味やイデオロギーはそれを採択する主体の判断によって、変わると言えるが、そのものは変わるとは言えない。しかし、それは重要なことではないであろう。われわれにとっての問題は6）や7）であろう。これはいずれも無反省に変わったと語るだけではすまされない重要な面をもっているからである。6）の場合も7）の場合も、ともに自己の直面した事態によって、己れと他者の姿をある意味で明確に認識しうるようになった（例えば、自分のエゴイズムに気づく、積極性に気づくというような）のである。そこがあたかも自分が変わったかのような思いを抱かせるのではないだろうか。そこで最初に書いた精神科を訪れた人の問題に行き着く。性格は変わるか。これまで見てきたところでは、性格が変わるということを積極的に押すものはないと思われる。もとから備わっていた性格と考えられるものを、その主体である本人が何らかの意識をもって、その都度その都度自分の判断によって、よしと思う方向にそれを用いたのである。あるいは他者からそれが引き出されたのである。A子さんの場合なら、それはあるグループでのダイナミックスが作用して、隠れていた性格がはっきりし、それをよしとして用いるようになったのであり、モーセやパウロの場合はそれを引き立てたのは神の力である。

それゆえ、こと人間の性格や生き方に関しては、それが「変わる」という表現はただの現象を記述するものにすぎないように思われる。現象的に変わったと見えても、それはまた別の局面が展開したものと考えた方が、事柄に即していないか。つまりAとBという性格を両方もっている場合、以前はAの方がBよりも強く出ていたが、今度はそれが逆になったという風である。あるいは、さらに言うなら、単なる変化というよりは、それは「変容」、つまり既にあるものがその本来の姿をあますところなく表現されたもの、と言うべきではないだろうか。その上、性格というのはその人の生物的・生理的な構造とどこか深く結びついているところがあって、Aという人は不可避的にxという性格をもっており、それが変わるとか変えるとかいう範疇のものではないような気がする。

一般に人間に関してはそれがあるがままに終始することはなく、自己からの、他者からの様々な影響を受けるものである。その力が個人の性格や考え方に作用し、それを鍛え、練り上げてゆく。この結果が今ここで言う「変容」である。それが以前とは違った姿を呈するようになったため、一般に「変わった」と言われるのであるが、単に「変わった」のではなく、以前にあったものが、新たな様相のもとに現われるようになったのである。以前の姿とは異なっているために、「変わった」と言えるかもしれないが、その元にあるものは変わらず（一つではなく多数）、かえって本来の輝きを増しているとさえ言える。

このような意味で、人間の性格や人となりといったものは、本来固定した何かではなく、いくつもの特質の間に「ゆらぎ」があって、それがその都度その都度の方向づけを受けて顕になっていくものではないだろうか。極端な言い方

をすれば、二重人格や三重人格的な要素をわれわれは皆備えているのである。ただそれが対社会的に個人の中で調整されているのであるが、そうした多層的ともいえる人格構造をわれわれは有している。ある人がある時わかったと思っても、別の機会にはわからなくなるのは、そうした構造のせいである。ある意味ではこの「ゆらぎ」は豊かな方が面白みがあるが、それではつきあいきれないという人は、その「ゆらぎ」のいくつかを深層の方に、譲り渡しているのであろう。ある時、その一端を知って、我がことながら、唖然とするのはそのためである。

人間は一様な仕方で捉えられるものではなく、一面的把握を許さない奥深いものがある。われわれが表層の「変化」の部分だけに目を奪われずに、多面的な人間理解、自己理解を心がけることにこそ、豊かな人生への指針が潜んでいると考えられる。

参考文献

アリストテレス　『自然学』　岩波書店
（特に１９２ｂ１４．２００ｂ１２－２０１ｂ１５，
２０１ａ８，２０１ａ１２など．）

ヤスパース　『精神病理学原論』　西丸四方訳
みすず書房　１９７９

アンリ・エー　『意識』Ⅰ．Ⅱ，　大橋博司訳
みすず書房　１９６９，１９７１

中沢新一　『雪片曲線論』
青土社　１９８５

武者利光　『ゆらぎの世界』
講談社ブルーバックス　１９８８